



医学部に送った生徒 { 1796人 }

メディカルラボ 教務統括

可児 良友さん(51)

大学入試がピークを迎えている。今年も「合格通知が自宅に届きました」という知らせが続々と届く。そんな報に接すると、周囲にも構わず涙が止まらなくなる。成績が伸び悩み苦労した生徒からだと、喜びはひとしおだ。

2006年から医学部専門の個別指導予備校、メディカルラボ(本部・名古屋市)で、カリキュラム作りや教材選びなど全体の運営を統括する。

門をたたく生徒は、高校や大手予備校の授業についていけなかった生徒も少なくない。アルファベットが書けず入校時に成績が振るわなかったり、ナイフを持って授業に来たりする生徒もいた。そんな生徒と根気よく付き合い、医学部に送り出してきた。うわさを聞きつけ、講演会には多くの保護者が詰めかける。9年間でメディカルラボから医学部に合格させた生徒は今年11日時点で1796人にのぼる。

子どもの頃は、田畑や川でカエルや魚を捕まえては、ハサミで解剖していた。いまの担当科目が生物なのは、そのためでは、と本人は話す。

注目される教え方にも、実はユニークな経歴が生きている。演劇だ。

地元の神社に奉納する村歌舞伎を子どもの頃から演じ、高校でも演劇部に。大学時代、名古屋を拠点に「動く絵画」と称される独自の舞台で人気の劇団クセックACTと出会った。「こんな肉体のパフォーマンスができるのか」。舞台に魅せられ、大学2年のときに入団した。大学を離れた後も、劇団の関係者が経営する学習塾で働き、演劇を続けた。

観客が何を求めているか感じ取り、その呼吸に合わせるように演じる。培ったのが、独特の「間」の取り方だ。授業でも大切にしているのは、生徒との「間」だ。マンツーマンだからこそ、何かを教えた後、あえて間を置く。それから次の単元に進む。生徒の表情を見つめ、理解しているかどうか確かめる。生徒が納得していない様子なら、3分でも5分でも待つ。

苦い思い出がある。メディカルラボの2~3年目に教えた女子生徒がいた。宿題はやるし、模擬試験でもいい点数は取る。ただ、志望校には合格できなかった。「マンツーマンでも、彼女に寄り添えていなかった」と、当時を振り返る。理解できていないことをうすうす気づきながらも、表面上の関係を気にして、厳しく指導することができなかった。その彼女と今春、7年ぶりに、ある医大の受験会場で再会した。今も受験を続けていることに胸が痛くなった。生徒に配っているチョコレート菓子を渡して、「頑張って」と声を掛けた。

「この計算式はなぜこうなるの?」しばしば生徒にこんな問いかけをする。公式の丸暗記ではなく、仕組みから理解できているかを試すためだ。あの失敗を繰り返さないため、あえて何度も問い詰める。

努力を積み重ね医師になった教え子が、医療が発達していないアフリカに支援に行ったという話を聞いた。「医師としてこんな貢献ができた、という生徒の成長をみられるのが一番うれしい」 (北川慧一)

ストップウォッチを手に生物の演習問題を解かせていく。生徒の表情から理解しているかどうか見極める
— 東京都新宿区、飯塚悟撮影



「あさひかげ」のひみつ

休日は読み聞かせ

仕事が休みの日は、8歳と5歳の2人の子どもの絵本を読み聞かせるのが日課だ。2人は昔話や恐竜の物語などの絵本を図書館で借りてきては、朗読をせがむ。自宅には2人が「図書館」と呼ぶ本棚があり、手作りのバーコードを貼り付けた絵本が並んでいる。抑揚を付けての読み聞かせは、劇団で役者をしていたのでお手のものだ。

専用ボトルで水素水

愛用しているのは、水素水だ。「老化の原因となる活性酸素を体内から取り除いてくれる」と聞き、専用ペットボトルで持ち歩いている。



プロフィール

かに・よしとも 89年、メディカルラボなどを運営する啓光社(現キョーイク)に入社。15年から専務。著書に「偏差値20台から医学部合格したけど、何か質問ある?」(講談社)など。